

# 雛の職人衆

## ——三人の仕事部屋から——

皆川美恵子

雛人形は、一人の職人さんが、頭、衣

裳、小道具のすべてを作るのではないそう

です。頭を作る「頭師」、黒の絹糸を植え

込み結う「結髪師」、ガラスを吹いて眼球

を作る「眼球師」、金襴の布を断ち、縫い

上げ着せる「胴師」、松扇、烏帽子などを

作る「小道具師」、冠や簪、太刀を作る「鋳

師」と、多くの専門の職人衆の手をへて初

めて出来るのです。多くの手により少し

ずつ完成されていく雛には、それだからこ

そ女子の福をことほぐ力が秘められている

といえましょう。

雛職人の中には、七十歳を越えた明治生

れの人達も嬉しいことに健在で、一年の

間、休むことなく、年季の入った確かな腕

を奮っています。私たちは、そっと静かに

名人の仕事部屋に足を踏み入れ、やがて初

雛として照り輝く人形たちの、息づく様子

を覗いてみました。

### ◆頭師の仕事部屋

床にはあちこち胡粉が垂れて固まり、す

べすべした感触が足から伝わってきます。

桐のおが屑を正麩糊で練ったものを型に入

れ、頭を作ると、まずガラスの眼をつけ、

それから頭が完成するまでに、膠で溶いた

胡粉を何度も何度も塗っていきます。胡粉

は頭作りには欠かせないものなのです。

胡粉の粉が、牡蠣殻が堆積して五百年か

ら千年を経た牡蠣殻であることを、この仕

事場の主人より、初めて知らされました。

江戸の昔から人形作りには、利根川流域の

牡蠣灰が使われており、今でも下流の銚子

あたりで採掘された牡蠣灰を用いているそ

うです。

さて、鼻、唇、耳を作り終ると、胡粉の下に隠れた目を切り出して表情をつけ、口をあけていきます。そして上塗りをしませんが、この上塗りだけは、ぼたん貝の粉を 사용합니다。牡蠣灰より細かく白く、光沢の出るぼたん貝とは、蝶貝のことです。

「僕は腹を立てたことないよ、腹を立てたりしちや、お雛様の顔が怒っちゃうからね」今年七十三歳の頭師の名人、小宮映峰さんはこやかに語っていました。

### ◆ 胴師の仕事部屋

山田松花さんが人形を作るようになったのは、十九歳の時に、祖母さんと京都見物に行つてからのことでした。その時見た京人形のすばらしさに、何としてもその人形がほしいものの、四十八円という高価な額に手が出なかつたそうです。ところが、京極で巻薬に頭だけでささって売っているの

を見て、東京に帰り、すぐ手紙にお金を添えて、その頭を買いました。それから刺繍をたくさんして着物をこしらえ、人形の胴を作り、着物を着せて、とうとう自分で人形を仕上げました。その後、松倉光山の門下に入り、長い修業を積んで今にいたっています。

雛たちの豪華な金襴の衣裳は、張りをもたせるために、まず和紙で裏うちをしています。薬で作った胴にこれらの衣裳を着せつけていくわけですが、襟元が一番難しく、特に女雛の襟の重ねには、気を配るそうです。最後に、髪がきれいに結び終った映峰さんの頭がのり、雛は嬉しそうに微笑みます。

### ◆ 小道具師の仕事部屋

茂原浅次郎さんは、仕事台の前で、ちょうど随身の背負矢を作っていました。黒い

漆が塗られた細い竹の先に、矢羽根として鶏の白い羽根をつけ、赤い糸できりりと巻いた矢でした。一本一本このように丹念に作り上げられる矢は、今では珍しく、多くは（矢以外の小道具もそうですが）プラスチックで機械によって作られています。

松扇のことを尋ねると、昔は松を経木のように薄く削る名人がいて、そこから分けてもらつて本当の松扇を作つたといひます。今はその名人がおらず、紙に胡粉を塗り、ペーパーをかけ、松や梅の絵を金箔などをを使って描いているということでした。

茂原さんは、昭和六年に発行された『日本雛祭考』（有坂与太郎著）にも、当時活躍している小道具師として、師の渡辺久芳と共に名を記された、この道六十年からの名人です。いつもそばで仕事を手伝っている奥さんと、喜寿を迎えた茂原さんの手になる松扇を、帰る時におみやげとして頂いてきました。